

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
分担研究報告書

総合的な思春期・若年成人（AYA）世代のがん対策のあり方に関する研究

「若年男性がん患者のニーズと支援」

研究分担者 中村晃和 京都府立医科大学 泌尿器科 客員教授

研究要旨: 希少がんでありAYA世代男性がんの代表である精巣腫瘍患者のニーズを把握し、問題点を掘り起こしその対策を行う

A．研究目的

泌尿器科領域において、AYA世代男性がんの代表は、精巣腫瘍（胚細胞腫）である。しかし、発生頻度が10万人に約1-2人と低く、患者のニーズ把握などについての研究は不十分である。また、AYA世代とは言ってもやや年齢層が高く、就労や家庭、妊孕性の問題を抱えながらの治療となる。本研究では、AYA世代男性がん患者のニーズを把握し、問題点を掘り起こしその対策を行うことを目的とする。

B．研究方法

京都府立医科大学附属病院で治療中および経過観察中の患者に対して、本研究グループの統一調査票を用いて実態調査を行なった。

（倫理面への配慮）

京都府立医科大学のIRB申請を行なった。回答は無記名で、アンケート用紙の返送をもって、同意を得られたと判断する。

C．研究結果

92名の男性がんサバイバーから回答を得た。白血病が29名で、胚細胞腫瘍が25例で約50%を占めていた。

後遺症や合併症についての悩みが多く、治療時20歳以上（27例）では、不妊や生殖機能に対する情報、相談先を知りたかった割合が多かった（63%）。実際の合併症としての乏精子症は16例に認め、不妊症を訴えたかも2名いた。また、精巣腫瘍の場合、後腹膜リンパ節郭清によっておこる射精障害を25例中7例に認めた。

最も悩んだ事柄では、高司法、合併症が最も多く37%で、仕事のこと（30.4%、将来のこと（30%）、生殖機能（24%）であった。

妊孕性や就労についての不安が浮き彫りとなったが、相談できる部署などが明確でなく、とくに男性のがんの場合、その支援体制が脆弱性が明らかとなった。

合併症に関する説明を受けていない方が20例（21.7%）に認められた。説明を受けた方では、治療開始前が41%で最も多かったが、約10%では、治療開始後や幹細胞移植前といった時期に説明を受けていた。

D．考察

社会生活や家庭生活の中で、中心的な役割を果たしてゆくべき年代であるが故のくのがんがあると推察された。妊孕性（精子保存や射精神経温存手術）に対する周知がいきわたらず、情報が手に入りにくいと考えられた。

E．結論

化学療法や手術などがん治療に伴う生殖及び性機能への影響は非常に大きな問題となっている。AYA世代の男性のがんの代表は胚細胞腫（精巣腫瘍）、リンパ腫などの血液腫瘍であるが、希少がんゆえの情報の少なさや、若年男性特有の「多くを語らない」という特徴と、医療者側の治療を優先させるという意識から、性機能や妊孕性についての説明がないがしるにされやすい側面を持っている。性機能・妊孕性についての説明が必要と分かっているにもかかわらず説明ができていないケースが多くあることも問題であり、医療者側の意識および知識を増やすことが重要であると考えられた。

また、すでにいくつかの都道府県ではネットワークが構築されてきているものの、どこかの施設で精子保存や生殖補助技術を用いた治療が可能かを知らしめるネットワークの構築が急務であると考えられた。

F．健康危険情報

該当なし

G．研究発表

1. 論文発表

Takizawa A, Nakamura T et al. The usefulness of testosterone administration in identifying false-positive elevation of serum human chorionic gonadotropin in patients with germ cell tumor. J Cancer Res Clin Oncol. 2018;144:109-115.

2. 学会発表

・中村晃和 シンポジウム 進行性精巣腫瘍に対する化学療法後の残存腫瘍の取り扱いー評価と治療
「化学療法後の残存腫瘍切除の意義」
第105回日本泌尿器科学会総会 2017/4/21-24, 鹿児島

・中村晃和 ワークショップ poor risk胚細胞腫瘍治療のコンセンサスと課題 「救済化学療法」
第15回日本臨床腫瘍学会学術集会 2017/7/27-29, 神戸

・中村晃和 ケーススタディ 難治性精巣がんの治療戦略 「keynote lecture」「救済化学療法」
第67回日本泌尿器科学会中部総会 2017/11/24-26, 大阪

H. 知的財産権の出願・登録状況
(予定を含む。)

該当なし